

現代首里方言訳『沖縄対話』(5)

—「第五章 遊興之部」—

仲原穰・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政・
渡名喜勝代・山田美枝子・大道好子

はじめに

本稿は仲原・比嘉・仲里・新垣・国吉(2012)、仲原・比嘉・仲里・新垣・国吉(2013)、仲原・仲里・新垣・国吉(2014)、仲原・仲里・新垣・国吉・渡名喜・山田・大道(2015)(以下、仲原他2012、仲原他2013、仲原他2014、仲原他2015と称する)の続編であり、明治13(1880)年に発行された『沖縄対話』に記載された琉球語と現代首里方言の比較のための基礎的研究である^{註1}。今回は「第五章 遊興之部」を取り上げる^{註2}。

『沖縄対話』は日本語(標準語)学習のために作られたものとみられ、本文の日本語の文の理解を助けるために、本文の脇に片仮名で琉球語が添えられたものである。しかし、出版意図や読者の想定などは『沖縄対話』に記されていない。

『沖縄対話』にローマ字を書き添えて出版した糖業研究会出版部(1916:6)では、この『沖縄対話』の本文の「琉球語」を「首里語」と限定し、話者に関しても「護得久代議士の父故護得久按司朝常氏等」と言及している。

また、これまでの報告(仲原他2012、仲原他2013、仲原他2014、仲原他2015)でも述べたが『沖縄対話』では「～ガ～ラ」という疑問・推量の係り結びを頻用している。一方、「現代琉球語」で、この係り結びを多用する地域はあまり多くないが、「首里方言」では現在もこの係り結びを使用している。

これらを勘案すると『沖縄対話』に併記された琉球語は「首里方言」であると考えることができる^{註3}。

なお、国立国語研究所(1963:19)に挙げられた三つの階級(デーミョー:貴族階級、サムレーまたはユカッチュ:士族階級、ヒャクショー:平民階級)のうち、『沖縄対話』の「首里方言」がどのことばと最も近いのかについては

詳しい分析が必要であるが、陶業研究会（1916）の記述のほか、現代の首里方言では使用されていない語・表現があちらこちらにみられることなどから、国立国語研究所（1963）の「deemjoo◎」に近いと思われる「ウドゥン トウンチ」（現代首里方言では士族よりも上の階級とされることば。語源は「御殿 殿内」）と呼ばれる人々の話すことばに近いと推察されるが、現在の首里でこの「ウドゥン トウンチ」の「クトゥバ」（ことば）を自由に使いこなす話者はほとんどいないと思われる^{註4}。

今回取り上げた「現代首里方言」は、旧士族階級や旧平民階級のことばである。両者の区別が全くないわけではないのだが、分けて示すほどの「差」ではないため、本稿では「現代首里方言訳」としてまとめて掲載する。

なお、現代首里方言で他の表現がある際は「備考」に記述した。また、話者^{註5}によって単語や表現が異なる場合にも、その差異を「備考」で示した。

本稿で用いたのは『琉球語便覧』に収載の『沖縄対話』である。当初、調査では復刻版『沖縄対話』を用いていたが、『琉球語便覧』収載の『沖縄対話』には、「伊波普猷氏に乞うて別に之を羅馬字で写して貰った」（『琉球語便覧』凡例。旧字は新字に直して引用した。また、「歴史的仮名遣い」も「現代仮名遣い」に改めた）「ローマ字表記」が併記されており、明治13年の発音を再現する際の重要な手がかりとなる。そこで、底本を『琉球語便覧』収載のものに切り替えた。

凡例

1. 調査で使用了『琉球語便覧』の本文（和文）、本文（片仮名）も表に取り入れ、明治期の首里方言と現在（平成）の首里方言を対照できるようにした。
2. 『琉球語便覧』本文の和文表記は漢字カタカナ交じり文で書かれており、表記も「歴史的仮名遣い」「旧字体」で記されている。本稿では読みやすさを考慮し「現代仮名遣い」「新字体」にし、漢字カタカナ交じり文から漢字ひらがな交じり文に改めた。このほか、本文の表記に際し、漢字に振られたルビはひらがなにし、漢字の後に（ ）を付し、その中にルビを入れた。また、踊り字は本字に置き換え、区切りとして使用してある「。」を空白にした。また文末に句点を添えた。
3. 『琉球語便覧』の標準語に併記された首里方言の記述には片仮名が使用されており、補助記号「・」（圏点）が記されている。しかし、圏点は非常に小さく見づらいため、読み手が読み誤りやすい。本稿ではこの圏点を使用せず、簡易音韻表記として片仮名を使用した（「 $\dot{\text{テ}}$ 」＝「ティ」、「 $\dot{\text{デ}}$ 」＝「ディ」、「 $\dot{\text{ト}}$ 」＝「トゥ」、「 $\dot{\text{ド}}$ 」＝「ドウ」、「 $\dot{\text{ヒ}}$ 」＝「フィ」、「 $\dot{\text{ヘ}}$ 」＝「フェ」、「 $\dot{\text{ホ}}$ 」＝「フォ」、「 $\dot{\text{シ}}$ 」＝「スイ」、「 $\dot{\text{ジ}}$ 」＝「ズイ」、「 $\dot{\text{ツ}}$ 」＝「ツイ」、「 $\dot{\text{イ}}$ 」＝「イイ」、「 $\dot{\text{ウ}}$ 」＝「ウウ」と表記〔『琉球語便覧』のローマ字で確認済み〕。このほかにも長音は「ー」で表記し、「子」は「ネ」に改めた。
4. 現代首里方言の記述は、広く一般に利用してもらえるように音声的仮名表記にした。片仮名表記は西岡・仲原（2006[2000]：192-193）の表記を採用したが、句読点に関しては現代日本語に準じて補って示した。ちなみに、首里方言には特殊な発音がいくつかみられるため、以下のように特殊な片仮名で表記する。

「ツワ」「ツヤ」「ツン」「ツウイ」「ツウエ」「ウウ」「イイ」「ン」
/ʔwa/ /ʔja/ /ʔN/ /ʔwi/ /ʔwe/ /'u/ /'i/ /'N/

5. 会話文は、一つ一つの会話を一つの枠内に入れた。会話文の区別については『沖縄対話』を参照した。『沖縄対話』では話者を○、○○で区別しているが、いくつか適合しない部分もあった。本稿では、同一人物が発したとみられるセリフは同じセルに入れた。なお、会話文には回ごとに通し番号(No)を付した。

■第五章 遊興之部 第一回

No	頁	本文(和文)	『沖繩対話』本文(沖縄語)
1	p.59	今日は 久し振(ぶ)りの休暇(ひま)を得ましたから 遊びに参りますが 貴方も 御出なされませぬか。	チューヤ ナゲー ナティカラヌ ユリー ヤヤビークトゥ アスビーガ イチヤブーシガ ウンジュン イメンシヨラリーヤ シャビラニ。
2	p.59	それは 宜うござりましょうが 何処(どこ)へ 御出の 御積りでござりますか。	ウレー ユタシヤ ヤブーシガ マーンカイ ウンジミシェール ウカンゲー ヤヤビーガ。
3	p.59	識名が 宜うござりましょう。	シチナンカイ ユタシヤー ネーヤビラニ。
4	p.59	成程 彼地(あそこ)は よい様子ではござりますが 路程(みち)も遠くありますで 最早(もはや)時刻が 晩(おそ)くは ありませぬか。	ナルフドゥ アマー ユタシャルグトー アヤブーシガ ミチヌ トゥーサヌ ナー トゥチヌ ニッカ ナテー ウウヤビランカヤー。
5	p.59	少し 晩くなりましたが 馬で行きましたら 未(ま)だ 随分(ずいぶん) 遊ぶ間は ありましょう。	ウフエー ニッカ ナテー ウヤブーシガ シマカラ イチドゥンセー ナマカラ ヤティン ズイーブン アスィパリーヤ シャビラニ。
6	p.60	左様なら 御供(とも)を致します。	アンシェー ウトウム シャビラ。
7	p.60	貴方は 未だ(まだ)彼地へは 一度も 御出に なりませぬか。	ウンジョー マーダ アマンカイエー イチドゥン イメンシヨランガ アヤビラ。
8	P.60	未だ参りませぬが 彼地には 支那人の書が 許多(あまた)あると聞きましたが如何でござりましょう。	マーダ イチャビランシガ アマ ナカイエー トーヌチュヌ ジーヌ ウフオーク アンディチ チチョーヤブーシガ チャーガ ヤイビラ。

■第五章 遊興之部 第一回

No	現代首里方言	備考欄
1	チューヤ * <u>ナゲー</u> ナティカラヌ フィマ ヤイビークトゥ アシビーガ イチャビー シガ ウンジュン ** <u>メンシェー</u> ビラニ。	*「マルケーティ フィマ イーティ チョーイ ビークトゥ」でもよい。 **国吉氏は「メンソーラニ」でもよいという。
2	ウレー * <u>ユタサイ</u> ビーシガ、マーンカイ メンシェール ** <u>カンゲー</u> ヤイビー ガ。	*国吉氏は「マシェーヤ ビーシガ」 **90 代、80 代の話者は「ウカンゲー」を使用 するが 70 代は「カンゲー」を用いる。国吉氏 は「チムエー」でもよいという。
3	シチナー * <u>ユタサー</u> ネー(イイ)ビラニ。	*「ユタシコー」でもよい。
4	* <u>ナルフドゥ</u> アマー ユタサル グトー アイビーシガ、ミチヌ トゥーサヌ ナー ニッカ ナテー ウウイビランガヤー。	*「ンチャ」(そういえば)や「アネー マシ ヤイ ビーシガ」(それはよいですが)でもよい。
5	* <u>イフエー</u> ニッカ ナテー ウウイビーシ ガ ャンマカラ イチドゥンシェー ナマカラ ヤティン ** <u>ユブドー</u> アシバリーイエーサ ビラニ。	*70 代の話者は「ウフエー」、80 代以上の話者 は「イフエー」がよいとする。本稿では「イフエ ー」を採用する。以下同じ。**国吉氏は「テー ブンネー」でもよいという。
6	アンシェー ウトゥム サビラ。	
7	ウンジョー * <u>マーダ</u> アマンカイエー イチドゥン ** <u>メンソーランガ</u> アイビー ラ。	*「ナーダ」でもよい。以下同じ。**80 代以上の 話者は「ツウェン～」や「ツメン～」と発音するこ とが多い。国吉氏は「メンソーチエー ウウイ ビランイエーサビラニ」がよいという。
8	マーダ イチャビランシガ、アマ * <u>ナカ</u> <u>イエー</u> トーヌ ャチュヌ ** <u>ジーヌ</u> ウフォ ーク アンディチ チョーイビーシ ガ、チャーガ ヤイビーラ。	*話者のなかには「ンカイ」の方がよいとする 人もいた。本稿では人数の多かった「ナカ イ」を採用する。**国吉氏は「カチムン」(書き 物)の方がわかりやすいという。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
9	p.60	冊封使の留題(りゅうだい)は 沢山ござります。	トーヌ アジヌジーヤ ウフォーク アヤビーン。
10	p.60	よく出来て おりますか。	ユーディキティガ ウウヤビーラ。
11	p.60	大概(たいがい) よく出来ておった と思います。	テーゲー ユー ディキトーンディ ウマーリヤビーン。
12	p.60	勸耕台(くわんこうだい)は 如何(どう)いう処で ござります。	クワンコーダイエー チャヌグートル トウクルガ ヤヤビーラ。
13	p.60	至て 眺望(ちようぼう)の宜(よろ)ひ処であります あれにも 清使林鴻年(りんこうねん)の 題字が ござります。	ドゥットウ チーチヌ イイー トウクル ヤティ アマニン トーヌアジ リンコーニンヌ ジーヌ アヤビーン。
14	p.60 -61	水も 余程(よほど) 良(よい)と申すことでござりますが 煎茶(せんちゃ)煎(あ)など)は 宜(よろ)うござりましょう。	ミヅイン ドゥットウ ユタシャンディ イヤビースィガ チャーンデーヤ ユタシャラ ハヅィ デービル。
15	p.61	誠に 奇麗(きれい)な 水でありますから 煎茶には 屹度(きつと) 宜(よろ)うござりましょう。	ドゥットウ チリーナ ミヅィ ヤヤビークトウ チャーネー チツシティ ユタシャヤビーラ ハヅィ。
16	p.61	此にも 清使の題字(だいじ)で 育徳泉(いくとくせん)と 書いてあります。	クマニン トーヌアジヌ ジーヌ イクトウクシン ンディ イチ カチャーヤビーン。
17	p.61	只今 馬が参りました。御袴(ごはか)を御召(ごめ)しなされませぬか。	ナー ンマー チョーヤビーン。ウハカマ ミシェービリ。
18	p.61	否(い)や 此儘(このまま)で 参りましょう。	アヤビラン。クヌ ママッシ イチャビラ。

No	現代首里方言	備考欄
9	トーナ アジヌ ジーヤ ウフオーク アイイ ビーン。	
10	ユー * <u>ディキトーイイビーミ</u> 。	*国吉氏は「ウディキソーイイビーミ」がよいとい う。以下同じ。
11	テーゲー ユー * <u>ディキトーン</u> ディ ウマ ーリヤビーン。	*国吉氏は「ウディキソーン」がよいという。
12	* <u>クワンコー</u> ダイエー チヤングートル トウ クルガ ヤイイビーラ。	*70代の話者のなかには「カンコー」と発音す る人もいる。
13	ユフドゥ * <u>ナガミヌ</u> イイー トウクル ** <u>ヤ イイビティ</u> 、アマニン トーナアジ リンコー ネンヌ ジーヌ アイイビーン。	*80 代以上の話者は「チーチ」で(景色、眺め) の意で使用するが、70代の話者は「チーチ」 で(気持ち、気分)の意でしか使用しない。以 下同じ。 **国吉氏は「ヤイイビーレー」がよいという。
14	ミジン * <u>ユフドゥ</u> ユタサンディ ** <u>ツヤビ ーシガ</u> 、ウチャ ンデーヤ ユタサル ハジ ヤイビーン。	*「イッペー」でもよい。 **丁寧なときは「イヤビーシガ」のように「ツ ヤ」でなく「イヤ」と発音するが、通常は「ツヤビ ーン」を用いる。
15	イッペー チリーンナ ミジ ヤイイビー クトウ ウチャンカイエー チットウ ユタ サル ハジ ヤイビーン。	
16	クマニン トーナ アジヌ ジーツシ イク トウクシン ンディ イチ カチエーイイビー ン。	
17	ナー ツンマー チョーイイビーン。ハカマ ハチミシェービラニ。	
18	アイイビラン。クヌ ママツシ イチャビラ。	

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
19	p.61	貴方 御先に 御出下され。	ウンジョー ウサチ ウンジ ミシエー ビリ。
20	p.61	左様なら 御(お)先へ 御免(ごめん)を 蒙(こうむ)りましょう。	アンシエー ウサチ ナヤビラ。
21	p.61	此林(はやし)の内が 識名園でござります。	クヌ ヤマヌ ウチェー シチナヌウド ウン ヤヤビーン。
22	p.61	最早 参りましたか。 成程 育徳泉の題字が 見えておりますが 水坪(みづつぼ)は どの辺でござりましょう。	ナー チョーヤビーミ。ンチャ イクト ウクシン ンディ イチ カチエースイ ガ ミートーヤビースイガ カーヤ マ ーヌ フィンガ ヤヤビーラ。
23	p.61	水はあの石の下に出でおります。	ミヅエー アヌ イシヌ シチャナカイ アヤビーン。
24	p.62	此額や 聯杯(れんなど)も 皆 上出来の様で ござります。	クヌ ガクンデー リングンデー ン ナ ジョーディキヌ グトーヤビール ンナー。
25	p.62	左様でござります。随分 好い出来とみえます。	アンデービル ズイブン ユーディ キトーンディ ウマーリヤビーン。
26	p.62	築山(つきやま)泉水(さんすい)杯ノ景色(けしき)は 幽邃(ゆうすい)な模様(もよう)で 殊(こと)にあの 汀(みぎ)には 白き鳥の 馴れておりますところは 誠に 妙(みょう)でござります。	ムイ シンスインデーヌ チーチェー シヅィカナ ムヨー ヤティ ビシティ アヌ ミヅィジワナカイ シルドウイヌ ナリトーセー ドウツトゥ チミュー ヤ ヤビーサー。
27	p.62	そうでござります。王右軍(おういうぐん)が 蘭亭(らんてい)の 風景(ふうけい)も 此より 佳(よ)くは ありますまい。	アンデービル。オージシヌ ランティ ーヌ チーチャティン クマヤカ マ シエー アラン ハヅィ デービル。

No	現代首里方言	備考欄
19	ウンジョー ウサチ * <u>ツンジミシエー</u> ビリ。	*国吉氏は「イメンシエービリ」または「メンシエービリ」がよいという。
20	アンシエー ウサチ ナイビラ。	
21	クヌ ヤマヌ ウチェー シチナヌ ウドウン ヤイビーン。	
22	ナー チョーイイビーミ。 ンチャ、イクトウ クシン ンディイチ * <u>カチエーイビーシガ</u> ミートーイイビーシガ、カーヤ マーヌ フィンガ ヤイビエーラ。	*大道氏は「カチエール ジーヌ」がよいという。
23	ミジエー アヌ イシヌ シチャ* <u>ナカイ</u> アイビーン。	*70代の話者は「ンカイ」を用いる人もいる。
24	クヌ ガクンデー、リヌンデーヤ ムル ジョー ディキヌ グトーイイビールンナー。	
25	アン ヤイビーン。 イッペー ユー * <u>ディキトーン</u> ディ ウマーリ ヤビーン。	*国吉氏は「ウディキソーン」がよいという。
26	ムイトウカ イチンデーヌ ナガメー シジカナ ムヨー ヤティ、クトウニ アヌ * <u>イチヌハンタナカイ</u> シルドウイヌ ** <u>ナリトシエー</u> イッペー フィルマサイイ ビー*** <u>ツサ</u> 。	*「イチヌハナ」は80代以上しか使用しない。 **国吉氏は「ウチャトシエー」でもよいという。 ***山田氏は「サ」がよいという。
27	アン ヤイビーン。 オーユーゲンヌ * <u>ランテーヌ</u> ナガミ ヤティン クマヤカ マシエー アランディ ウマーリヤビーン。	*固有名詞は現代では音変化せず、和文のまま外来語として用いるため、「ランテー」とする。以下、固有名詞はこれに同じ。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
28	p.62	時に 日暮(ひぐれ)に なりました が 御庇(かげ)で 今日は 楽しみ ました 徐々(そろそろ) 帰り ましょう。	チュー ナー フィーン サガトーヤビ ー スィガ ウカジニ チューヤ タヌシ ミ シャビタン。 ヨーンナー ケーヤ ビラ。
29	p.60	勸耕台は 御覧なされませぬ か。	クワンコーダイエー ウミカキランガ アヤビーラ。
30	p.60	最早 晩くなりましたから 又の 事に 致しましょう。	ナー ニッカ ナトーヤビークトウ ナ ー チュケーニ イチャビラ。

■第五章 遊興之部 第二回

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
1	p.63	今日の 潮(しお)は 何時頃 参り ますか。	チューヌ シューヤ ナンドウチ ミ チャビーガヤー。
2	p.63	八時頃には 大抵(たいてい) 満 潮で ござりましょう。	ハチジグルウウデー テーゲー ミ チシュヤラ ハヅィ デービル。
3	p.63	月は 如何でござりましょう。	ツイチャーチャーデービルガヤー。
4	p.63	月も 其頃 出ますから 丁度(ち ょうど)月見(つきみ)が 宜しい 時分でござります。	ツイチン ウヌクロー ンジー クトゥ チョードウ ツイチナガミン イー ジブン デービル。
5	p.63	それなら 船遊(ふなあそび)は 如 何でござりましょう。	アンドウンヤレー フナ アスイビ シ シ チャー デービルガ。
6	p.63	其れは 至極 面白(おもしろ)う ご ざりましょう。	ウレー ドウツトウ ウムツサラ ハヅィ デービル。
7	p.63	舟の手当(あたり)は 如何したら ば 出来ますか。	フニヌ ティグメー チャー シャラ ー ナヤビーガヤー。
8	p.63	舟は 私の 出入の者が 持て おりますで 何時でも 間(ま)に 合います。	フネー ワッターカラ ンジイリシャッ ツチュスイガ ナンドウチ ヤティン ナヤビーン。

No	現代首里方言	備考欄
28	* <u>チェー</u> 、 <u>ナー</u> フィーン サガトーイビーシガ、ウカジニ チューヤ タヌシミ サビタン。ヨーンナー ケーイビラ。	*国吉氏は「チョードウ」か「イージブンニ」がよいという。
29	クワンコーダイエー * <u>ソージミシエービラ</u> ニ。	*「ウミカキシエービラニ」や「ウミカキシソーラニ」でもよい。
30	ナー ニッカ ナトーイビークトウ、ナー チュケーンニ イチャビラ。	

■第五章 遊興之部 第二回

No	現代首里方言	備考欄
1	チューヌ * <u>スーヤ</u> ナンドウチ ミチャビーガヤー。	*70 代の話者のなかには「ウス」がよいという人もいる。
2	ハチジグル * <u>ナイネー</u> 、テーゲー ミチス ヤル ハジ ヤイビーン。	*「ネー」でもよい。
3	チチェー チャー ヤイビーガヤー。	
4	チチン ウヌ クロー ツンジー クトウ、チョードウ チチナガミ* <u>ン</u> イイージブン ヤイビーン。	*国吉氏は「ニン」でもよいという。
5	アンドウンヤレー * <u>フナアシビ</u> スシエーチャー ヤイビーガ。	*国吉氏は「フニ」ではないかという。
6	ウレー * <u>イッペー</u> ウムッサル ハジ ヤイビーン。	*「シタタカ」「ジュー」「ユフドウ」でもよい。以下同じ。
7	フニヌ * <u>ティグメー</u> ** <u>チャーサラー</u> <u>ナイビーガヤー</u> 。	*国吉氏は「シコーイエー」がよいという。 **渡名喜氏は「チャーシエー シマビーガヤー」
8	フネー ワッター* <u>カラ</u> ツンジイリ ソーシガ、ムッチョーイビークトウ ナンドウチ ヤティン ナイビーン。	*大道氏は「カラ」がよいという。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
9	p.63 -64	左様なら 私が 綱(あみ)を 持参して 魚を 捕りましょう。	アンシェー ワン アメー ムッチチ イヨー トウヤビラ。
10	p.64	いや。網船を 僦(やとい)まして 御同様は 見物が 宜しうござります。	アヤビラン。アミウチブニ タルディ ウンジュナー ワッターヤ チンブツイ シュセー マシ ヤヤビーン。
11	p.64	そんな 自由な事が 直に出来ますか。	ウヌ ヨーナ クトゥヌ ジューニ ナイ ガ シャビーラ。
12	p.64	はい。只今 召使(めしつかい)を遣(やり)て置きましたから徐々(そろそろ) 出掛(でかけ)ましょう。	ウー。ナマ ツィケー ツィカテーヤビークトゥ ヨーンナー ンジャビラ。
13	p.64	少し 御待ち下されませ。敷物(しきもの)火鉢(ひばち)杯(杯)を持せて 遣りますから。	ウフェー ウマチミシェービリ。シチムン フィパチンデー ムタチ ヤラ シャビークトゥ。
14	p.64	其辺も 出入の者が 心得て居りますから 早く 参りましょう。	ウリン クリン ンジイリ シャツチュルムンヌ カンゲーティ ウヤビークトゥ フェーク イチャビラ。
15	p.64	最早 少し 後れましたか。	ナー ウフェー ウクリティガ ウヤビーラ。
16	p.64	今が 丁度 能き 刻限(こくげん)でござります。	ナマ チョードゥ イイー ジブン ヤヤビーン。
17	p.64	彼(あ)の舟は 綱(あみ)を 投(う)っております。	アヌ フネー アミ ウツチェーヤビーン。
18	p.64 -65	なるほど、彼(あれ)が 傭(やとい)しました 漁船(ぎよせん)で ござりましょう。	シー。アレー ヤトゥテール アミウチブニ ヤラ ハツィ デービル。
19	p.65	して 御同然の 乗る船は 何れに おりますか。	アンシ ウマジューン ヌユル フネー マーナカイ ウウヤビーガ。

No	現代首里方言	備考欄
9	アンシエー アメー ワーガ ムッチッチ イヨー トウイイビラナ。	
10	アイイビラン。アミウチブニ タヌディ ウ ンジュナー ワッターヤ ミームン スシェ ー マシ ヤイイビーン。	
11	ウス ヨーナ クトウス * <u>ジューニ</u> ナイ ガ サビーラ。	*大道氏は「ウムイドゥーイイ」がよいという。
12	ウー。ナマ チケー チカデーイビーク トウ ヨーンナー * <u>ツンジ</u> ヤビラ。	*渡名喜氏は「イチャビラ」がよいという。
13	イフェー ウマチミシェービリ。シチムン フィバチンデー ムタチ ヤラ サビーク トウ。	
14	ウリン クリン ツンジイリッシ アッチュル ムンヌ カンゲーティ ウウイイビークトウ、 フェーク イチャビラ。	
15	ナー イフェー ウクリティガ ウウイイビー ラ。	
16	ナマ チョードウ イイー ジブン ヤイイビ ーン。	
17	アヌ フネー アミ ウッチェーイイビーン。	
18	* <u>シー</u> 。アレー ヤトゥテル アミウチブ ニ ヤル ハジ ヤイイビーン。	*国吉氏は「ンチャ」または「ダンジュ」がよいとい う。
19	アンシ * <u>ウマジュン</u> スイイル フネー マーンカイ ウウイイビীগ。	*70 代の話者は「マジュン」しか使用しないとい う人もいる。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
20	p.65	あの 柳の 蔭(かげ)に 繫(つな) いである 舟でござります。	アヌ ヤナジヌ カジ ナカイ クンチ ェール フニ デービル。
21	p.65	あれでござりますか。それでは 弁当も 御用意で ござりまし たか。	アリガ ヤヤビーラ。アンシェー ビン トーン グユーイイ ミショーチガ ウウ ヤビーラ。
22	p.65	申付けて置きましたから 定め て 持参しております。	イーツイキテーヤビークトゥ サダミテ イ ムッチョーラ ハヅィ デービル。
23	p.65	成程 毛布(けっと)の上に 載せ てある様に見えますが 酒は 如 何でありましたか。	ンチャ キットーヌ ウイナカイ ウチェ ール グトーヤビースィガ サケー チャーガ ヤヤビーラ。
24	p.65	酒も 来ているはずでござります。	サキン チョーラ ハヅィ デービル。
25	p.65	舟は 何れの方へ 遣りましょ うか。	フネー マーンカイ ハラサビーガ。
26	p.65	先ず 落平(おてんだ)の方へ 参 りまして 美(よ)き 水を 汲(く) ませましょう。	マヅィ ウテインダンカイ ンジ イー ミヅィ クマシャビラ。
27	p.65	月が 上りましたが 誠に 奇麗 で ござります。	ツイチヌ アガトーヤビースィガドゥッ トゥ イー チーチ ヤヤビーサー。
28	p.66	左様でござります。 今晚の遊 びは 好い 存立(ぞんじたて)で ござりました。	アン デービル。チューヌ アスイベ ー イー ウミタチ ヤテーヤビーサ ー。
29	p.66	魚が 沢山(たくさん) 捕(と)れま したが 煮付(につけ)みましょうか 又 焼(や)きみましょうか。	イユ ウフオーク トゥテーヤビースィ ガ ニーガ シャビーラ マタ ヤチガ シャビーラ。
30	p.66	別して 鮮(あざやか)な もので ありますから 塩焼(しおやき)に しては 如何でござりましょ う。	ビシディ アタラシャヤビークトゥ シ ューヤチ シャラー チャー デービ ルガ。

No	現代首里方言	備考欄
20	アヌ <u>*ヤナジヌ</u> カーギンカイ クンチェール フニ ヤイイバーン。	*渡名喜氏は「ヤナギ」という。
21	アリガ ヤイイバーラ。 アンシエー <u>*ビン</u> トーン グユーイイ シミソーチガ ウウイイバーラ。	*「ムチバンメー」ともいう。
22	イーチキテーイイビークトウ、 <u>*チャントウ</u> ムッチョール ハジ ヤイイバーン。	*70代以下は「サダミティ」を使用しない人が多く「チャントウ」を用いる。以下同じ。
23	ンチャ、キツウーヌ ツウイーナカイ ウチェール グトーイイバーシガ、サケーチャーガ <u>*ヤイイバーラ</u> 。	*渡名喜氏は「ヤイイバータラ」がよいという。
24	サキン チョール ハジ ヤイイバーン。	
25	フネー マーンカイ ハラサバーガ。	
26	マジ ウティンダンカイ ツンジ <u>*イイー ミジ</u> クマサビラ。	*「チュラミジ」(美しい水)、「シンチリミジ」(澄みきった水)、「マーサミジ」(うまい水)とも表現可能。
27	チチヌ アガトーイイバーシガ、 <u>*イッペ</u> ニ イイー ナガミ ヤイイバーッサー。	*P.115「第二回」のNo6「備考欄」を参照。
28	アン ヤイイバーン。 チューヌ アシバーイイー ウミタチ ヤテーイイバーサ。	
29	イユ ウフオーク トウテーイイバーシガ、ニーガ サバーラ、マタ ヤチガ サバーラ。	
30	<u>*ビッシンティ</u> 、トウティチャーキ ヤイイビークトウ ヤチュシエー チャー ヤイイバーガヤー。	*70代の話者は「トウクニ」がよいという人がいる。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
31	p.66	それでは 皆 塩焼に 致しまし ょう。少し 焼けたのがありま すで 先ず 御試(こころ)み 下さ れませ。	アンシエー ンナ シューヤチ シャ ビラ。ウフエー ヤキトーヤビースイガ マヅィ ウククルミ ミンショーチ ウミカ キ ミシエービリ。
32	p.66	これは 誠に 結構な 味で ござ ります。	クレー ドウツトゥ イイー アジ ヤヤビ ーサー。
33	p.66	最早 時刻も 移りましたで 中 島の方へ 舟を 向(む)けては 如 何でござります。	ナー トウチン ニッカ ナトーヤビー スイガ ナカシマ ムティンカイ フネ ー ンカーチ チャー デービルガ。
34	p.66	宜しうござりましょう。	ユタシャー ネーヤビラニ。

■第五章 遊興之部 第三回

1	p.67	明日は 何か 祭礼(まつり)でも ござりますか。	アチャー ヌーン マツィリンデーヌ アイガ シャビーラ。
2	p.67	はい。明日は 格別の 祝日(いわ いび)で ござります。	ウー。アチャー カクビツイヌフィー ヤヤビーン。
3	p.67	なるほど 天長節で ござります か。其れでは 余程 賑(にぎ)わ いましょう。	ンー。ティンチョーシツィガ ヤヤビ ーラ。アンシエー ドウツトゥ ニジヤ カ ヤヤビーラ ハヅィ。
4	p.67	例年 実(まこと)に 賑やかで ご ざります。	メーニン ドウツトゥ ニジヤカ ヤヤビ ーン。
5	p.67	当年も 何か 面白き事が あり ましようか。	クンドウン ヌーン ウムシリークトゥヌ アイガ シャビーラ。
6	p.67	委(くわ)しくは 存じませぬが 座楽(ざがく) 競馬(けいば)杯 があると 聞きました。揚煙 (はなび)も 定めて 用意が ご ざりましょう。	シカattoo シラノー アヤビースイガ ウザガク ンマシューブンデーヤ ア ンディ イチ チチャビタン。フィファ ナジン チスイティ ユーイー ショーラ ハヅィ デービル。

No	現代首里方言	備考欄
31	アンシェー、ムル <u>*ヤチャビラ</u> 。イフェー ヤキトーイイビーシガ、マジ <u>**ククルミッシ</u> ウサガミシェービリ。	*「マースヤチ サビラ」でもよい。なお、「マースヤチ」を「スーヤチ」という人もいる。 ** 70 代の話者のなかには「タミシニ」がよいという人もいる。
32	クレー <u>*イッペー</u> イー アジ ヤイビーッサー。	*P.115「第二回」のNo.6「備考欄」を参照。
33	ナー、トゥチン ニッカ ナトーイイビーシガ、ナカシマ ムティンカイイ フネー <u>*ンカーチ</u> チャー ヤイビーガ。	*「ンカーチャー」でもよい。
34	ユタサー ネー(イイ)ビラニ。	

■第五章 遊興之部 第三回

1	アチャー ヌーン マチリンデーヌ アイイガ サビーラ。	
2	ウー。アチャー <u>*カクビチヌ</u> フィー ヤイイビーン。	*国吉氏は「ビチダン」がよいとし、似た表現として「イルワキティ」「カワティ」があるという。
3	ンー。テンチョーセツガ ヤイイビーラ。アンシェー <u>*イッペー</u> <u>**ニジヤカ ヤイイビーラ</u> ハジ。	*P.115「第二回」のNo.6「備考欄」を参照、** 70 代は「ニジヤカ ヤイイビール ハジ」または「ハネーチョーイイビール ハジ」とする人もいる。
4	メーニン <u>*イッペー</u> <u>**ニジヤカ ヤイイビーン</u> 。	*P.115「第二回」のNo.6「備考欄」を参照、** 70 代は「ハネーチョーイイビーン」という人もいる。
5	クンドウン ヌーン <u>*ウムシリクトウヌ</u> アイイガ サビーラ。	*渡名喜氏や国吉氏は「ウム(ツ)サル クトウ」がよいとする。
6	シカットー シラノー アイイビーシガ、ウザガク ャンマスーブンデーヤ アンディイチ チチャビタン。 <u>*ハナビン</u> <u>**サダミティ</u> <u>***ユーイイ ソール</u> ハジ ヤイイビーン。	*仲里氏によれば打ち上げるのは「ハナビ」、手持ちは「フィファナジ(グー)」と区別するといふ。 **渡名喜氏は「チャントウ」が「カンナジ」がよいという。 *** 70 代は「シコーテール」という人もいる。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
7	p.67	揚煙は 何処(どこ)で 揚(あが)り りましょうか。	フィファナジェー マーウウティ アガラ ラシャビーガヤー。
8	p.67 -68	昨年は 潟原で 揚りましたが、 当年は 如何でござりますか ま だ存じませぬ。	クゾー カタバルウウティ アガラシャ ビータスイガ クンドー チャーガ ヤ ヤビーラ シャビラン。
9	p.68	夜分(やぶん)も 揚りますか。	ユルン アガラシャビーガヤー。
10	p.68	夜分が 多く 揚りましょう。	ユルドウ ウフオーク アガラ シュラ ハヅィ ヤイベーン。
11	p.68	揚煙は 夜分が 奇麗でござりま すが 凡そ 幾本(いくほん)位 揚 りましょう。	フィファナジェー ユルズドウ チュラサ ヤビースイガ テーゲー チャヌ シャク バカーイ アガラシャビーガヤー。
12	p.68	左様さ 昨年は 七八十本揚りま したが 当年も 其位なもので ござりましょう。	アン デービル。クゾー シチハチジ ップン アガラシャビータスイガ クン ドウン ウヌ シャコー ヤラ ハヅィ デービル。
13	p.68	船で 見物(けんぶつ) 致しまし たら 如何で ござりますか。	フニウウトーティ チンブツィ シャラ ー チャー ヤヤビーガ。
14	p.68	其れも 宜しうござりましょう が 此頃は 大分 冷(ひえ)ますか ら 深更(よふけ)は 余り よろし うござりますまい。	ウリン ユタシャーアヤビースイガ ク ヌウチェー ドウツトゥ フィーサヤビ ークトウ ユナカナイネー ドウク ユ タシコー ネーヤビラン。
15	p.68 -69	なるほど 御尤で ござりますが 何処(どこ)か 好(よ)き 場所は ござりますまいか。	シー。グムツトゥノーヤヤビースイガ マーン イートウクロー ネーノーア ヤビラニ。
16	p.69	拙宅にても 随分 見えますで 深更にも なりましたら 私の 方で 御覧なされましたら 如 何でござりましょう。	ワッター ヤーウウティン ズイーブンミ ーヤビークトウ ユナカ ナイドウンシュ ラー ワッターウウティ ウミカキショー チャラー チャーデービルガヤー。

No	現代首里方言	備考欄
7	ハナベー マーウウティ アガラサビーガヤー。	
8	クジョー カタバルウウティ アガラサビー タシガ、クンドー チャーガ ヤイビーラ *ワカヤビラン。	*「シツチェー ウウイビラン」でもよい。
9	ユルン アガラサビーガヤー。	
10	ユルドウ ウフオーク アガラスル ハジ ヤ イビーン。	
11	ハナベー ユルスドゥ チュラサイビーン ガ、 テーゲー チャヌ サク *ビケージ アガラサビーガヤー。	*山田氏は「ビケーン」がよいという。
12	アン ヤイビーサ。クジョー シチハチジ ップン アガラサビータシガ クンドウン ウ ヌ *サコー ヤル ハジ(ヤイビーン)。	*「アタイ」でもよい。
13	フニウウトーティ *チンブチ **サラー チャー ヤイビーガ。	*70代は「ケンブツ」がよいという人もいる。 **「スシェー」でもよい。
14	ウリン ユタサーアイイビーシガ、 クヌグ ロー フィーク ナトーイビークトウ、ユナ カ ナイネー アンスカ *カラタネー **ユタシコー ネーイビラン。	*70代のなかには「カラタンカイヤー」がよいと いう人もいる。 **70代は「マシェー」がよいという人もいる。
15	ツナー。*グムツトウノー ヤイビーシガ、 **マーガナ イートウクロー ネーンガ アイビーラ。	*大道氏は「グムツトウナ クトー」がよいという。 **70代の話者のなかには「マーン」でもよいと いう人もいる。
16	ワッター ヤーウウティン イPPER ユー ミーヤビークトウ、 ユナカ *ナイイビーネ 二 ワッターウウティ ウミカキミソーチャ ラー チャー ヤイビーガヤー。	*「ナイイダウンシェー」または「ナイイネー」でも よい。

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
17	p.69	難有(ありがと)ござりますが、御迷惑では、ござりませぬか。	アリガテー クーヤヤビースィガ ウサシツィケーヤ サーランガ アヤビーラ。
18	p.69	少しも 差支(さしつかえ)ませぬで 御家内様も 御連(おつ)れ 成されませ。	ウフィン サシツィケーヤ ネーヤビランクトゥ トウンチグニンジュン ウソーイイ ミショーチ イメンシエービリ。
19	p.69	左様なら 兎(と)も角(かく)も 明日は 御邪魔(おじゃま)を 仕りましょう。	アンシエー チャーシンカーシン アチャー ユシリリ ワドゥ ヤヤビール。
20	p.69	是非 御待申し上げます。	カンナジ ウマチ シチョーヤビーン。

■第五章 遊興之部 第四回

1	p.69 -70	末(ま)だ 日も高く ござりますが 博物館(はくぶつくわん)へ行きましょう。	ナマ フィーン タカーク アヤビークトゥ ハクブツィクワヌンカイ ンジ ナービラ。
2	p.70	それは 至極 よろしくござります。	ウレー ドウットゥ ユタシャヤビーン。
3	p.70	もし あの 練化(れんぐわ)石造(せきつくり)りの 屋(いえ)は 何でござりますか。	サリ。アヌ リングウ ズクイイヌ ヤーヤ ヌーガ ヤヤビーラ。
4	p.70	あれが 博物館であります。	アレー ハクブツクワン デービル。
5	p.70	誰(だれ)か 案内者(あんないじゃ)が ござりますか。	ターン アンネーン シュスイガ ウウヤビーカヤー。
6	p.70	はい ござります。	ウー。ウウヤビーン。
7	p.70	其では 案内者を 頼(たの)んで 参りましょう。	アンシエー アンネーシャ タルディイチャビラ。

No	現代首里方言	備考欄
17	アリガテー クーヤイビーシガ、サシ チケーヤ * <u>ネーイビラニ</u> 。	*「ネーイビランガヤー」でもよい。
18	ウフィン サシチケーヤ ネーイビラン クトゥ ウンジュナー グニンジュン * <u>ウマ</u> <u>ジュン</u> ウエンシェービリ。	*P.117「第二回」のNo.19「備考欄」を参照。
19	アンシェー チャーシンカーシン アチャー * <u>ユシリリ</u> <u>ワドゥ</u> ヤイビーラ。	*70 代の話者のなかには「イキワドウ」がよいと いう人もいる。
20	* <u>カンナジ</u> マッチョーイビーン。	*「ジフィ ウマチソーイビーン」でもよい。

■第五章 遊興之部 第四回

1	* <u>マーダ</u> フィーン タカサイビークトゥ、 ** <u>ハクブツクワンカイ</u> ツンジ *** <u>ナー</u> <u>ビラ</u> 。	*「ナーダ」でもよい **70 代の話者は「ハクブツ カン」という人が多い。以下同じ。***70 代の話 者には「ン(一)ジャビラ」がよいという人もい る。
2	ウレー イッペー ユタサイビーン。	
3	(* <u>グブリー</u> <u>サビラ</u>)。 アヌ レンガジュク イヌ ヤーヤ ヌーガ ヤイビーラ。	*国吉氏は「アヌー(ウタジニ サビラ)」がよい という。
4	アレー ハクブツクワン ヤイビーン。	
5	ターガナ アンネー スシガ ウウイビー ガヤー。	
6	ウー。ウウイビーン。	
7	アンシェー アンネーサー タルディカ ラ イチャビラ。	

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
8	p.70	其れが よろしく ござります。	アンシ ユタシャヤビーン。
9	p.70	先(まず) 花園(はなぞの)から 見物 いたしましょうか。	マズィ ハナズヌカラ チンプツィ シヤビーミ。
10	p.70	左様に 致しましょう。	アン シヤビラ。
11	p.70	此の 甘藍(はぼたん)は 大きなもので ありますが 何処から 参りましたか。	クヌ ハブタノー ウフィシャヤヤビー スイガ マーカラガ チョーヤビーラ。
12	p.70	大坂より 参りました。	ウーザカカラ チョーヤビーン。
13	p.70 -71	此 水(すい)仙は 誠に よく栄(さか)えましたが 何れの 産でござりましょう。	クヌ スイシノー ドウツトウ ユー ユカ トーヤビースイガ マーヌ サニ デー ビルガヤー。
14	p.71	昨年 支那(しな)の上海(しゃんはい)より 来(き)ました。	クズ トーヌ シャンハイカラ チョーヤビーン。
15	p.71	此は 山葵(わさび) で ござりますか。	クレー ワサビガ ヤヤビーラ。
16	p.71	米国(あめりか)の山葵で ござります。	アメリカヌ ワサビ デービル。
17	p.71	あれは 何と云う 花でござりますか。	アレー ヌーンディ イユル ハナ デービルガヤー。
18	p.71	鳳仙花(ほうせんくわ)と 申します	ティンシャーグーンディ イヤビー ン。
19	p.71	此は 珍(めづら)しい樹(き)で ありますが 何でござりましょう。	クレー ミヅイラシー キー ヤスイガ ヌーデービルガヤー。
20	p.71	此は 黄蛱蝶と申しまして 沖縄島の 名花で ござります。	クレー オーコーチョーグンディ イチ ウチナーヌ ナダケー ハナ ヤヤビー ーン。

No	現代首里方言	備考欄
8	アンシ ユタサイビーン。	
9	マジ <u>*ハナゾノカラ</u> <u>**チンプチ</u> サビ ーミ。	*山田氏は「ニワ」がよいという。 **70 代の話者のなかには「シーチマーイビ ラ」がよいという人もいる。
10	アン サビラ。	
11	クヌ ハボタノー <u>*ウフイ</u> マギサイビー シガ、マーカラガ チョーイビーン。	*70 代の話者は「ウフィナー」または「ウフィナ ーナー」がよいという。
12	オーサカカラ チョーイビーン。	
13	クヌ スイセノー イッペー ユカトーイビ ーシガ、マース <u>*サニ</u> ヤイビーガヤ ー。	*ここでは「種類」の意で「サニ」としたが、「産 地」の意なら「サン」の方がよい。
14	クジュ トース シャンハイカラ チョーイ ビーン。	
15	クレー ワサビ ヤイビーガヤー。	
16	アメリカヌ ワサビ ヤイビーン。	
17	アレー スーンディ <u>*ツユル</u> ハナ ヤイビ ーガヤー。	*渡名喜氏は「イール」の方がよいという。
18	<u>*ティンサーグーンディ</u> <u>**イヤビーン</u> 。	*儀保では「ティンサグー」である。 **「ツヤビーン」も可だが、敬意は低くなる。
19	クレー ミジラシー キー ヤイビーシガ、 スーンディ イヤビーガヤー。	
20	クレー <u>*オーゴチョー</u> ンディ イチ ウチナ ーヌ ナーダカサル ハナ ヤイビーン。	*明治期は「オーコーチョー」だが、現在はそ のように呼ばない

No	頁	本文(和文)	『沖縄対話』本文(沖縄語)
21	p.71	此の 薔薇(ばら)は 花が 奇麗で ござりますが 何と 申します。	クヌ チョーシュノー ハナヌ リッパ ニ アヤビースイガ ヌーンディ ヤビ ーガヤー。
22	p.71	白き花は 泰山白で 其次にある は 世界図(せかいのず)と 申し ます。	シルバナー タイザンハク ンディ イ ウイイ ウリガ シシヤナカイ アセー シケーヌズイーンディ ヤヤビーン。
23	p.72	最早 今日では 晩くなりました から 又 明日 参りましょう。 お陰で 誠に 面白くござりました。	ナー チューヤ ニツカナトークトゥ マタ アチャ チャービラ。ウカジニ ドウットウ ウムツサヤビータサー。
24	p.72	さようなら。	マタ ウウガナビラ。

おわりに

上に挙げた現代首里方言版『沖縄対話』は沖縄県立芸術大学附属研究所で行っている研究会^{註6}によって得られた言語資料の一部である。明治期の『沖縄対話』(以下、「明治期」と略す)と現在の首里方言(以下、「現代語」と略す)には、いくつか相違点がみられる。以下で用いる資料は本稿で示したものである。

1. 「ンカイ」の領域

現代首里方言の「ンカイ」には与格と方向格の用法がある。先行研究に西岡(2004)があり、「ナカイ」「ニ」「ガ」「カイ」と「ンカイ」との違いを現代日本語の方向格「～へ」と対照し分析している。しかし、明治期と現代語との通時的な用法の変化については言及されていない。本稿では「ンカイ」の使用範囲の違いについて述べる。

1.1 「ンカイ」の使用範囲が狭まった例

- ・「識名が 宜うござりましょう。」(『沖縄対話』第五章「遊興之部」第1回No3「和文」)

No	現代首里方言	備考欄
21	クヌ チョーシュノー ハナー リツパ ヤイ イビーシガ、ヌーンディ <u>*イヤビーガヤ</u> ニ。	*バラの品種に「長春」がある。明治期の「チョーシュン」はおそらくこれであろう。 **「イヤーイビーガ」(言っているのか)でもよい。
22	シルバナー タイザンハク ンディ ツユ イ、ウリガ シチャナカイ アシェー <u>*セ</u> <u>カイノズ</u> (ンディ) <u>**ヤイビーン</u> 。	*現在は日本語をそのまま借用して使用することが多い。特に固有名詞や現代になって、使用されるようになった語が多い。 **「イヤビーン」でもよい。
23	ナー チューヤ ニツカナトクトウ、マタ アチャ チャービラ。ウカジニ <u>*マクトウ</u> ニ ウムツサイビータサ。	*仲里氏によれば、ここは「イッペー」では「軽い」という。
24	マタ ウウガナビラ。	

(明治期)「シチナンカイ ユタシャー ネーヤビラニ。」

(現代語)「シチナニ ユタサー ネーヤビラニ。」

現代語では、日本語の「～は」に相当する「～ヤ」が「識名(しきな)」と融合して長音化した「シチナー」であるが、明治期は和文の「識名が」に「シチナンカイ」と表現している。現代語では「マーンカイ イチュガ(何処へいくの)」の返答として「シチナンカイ(識名へ)」とは使えるが、明治期のような使用例は管見ではみられない。これは「ンカイ」の使える範囲が狭まった例である。

1.2 「ンカイ」の使用領域が広がった例

現代語の「ンカイ」は、現代日本語「～に」と「～へ」の領域をカバーしているが、時間を示す場合のみ、「～ニ」が使用される(「ユルニ アチマユン。」夜に集まる)。しかし、以下のように明治期には「～ニ」や「～ナカイ」で表現したものも現代語では「ンカイ」になっている例もいくつかみられる。これは「ンカイ」が「ニ」「ナカイ」の領域を奪ったとみられ、使用範囲が広がったと考えられる。

(1) 「ニ」→「ンカイ」の例

- ・「煎茶には 屹度 宜うござりましょう。」(『沖縄対話』第五章「遊興之部」第1回 No15「和文」)

(明治期)「チャーネー チッシティ ユタシャヤビーラ ハヅィ。」

(現代語)「ウチャンカイエー チットウ ユタサル ハジ ヤイビーン。」

(2) 「ナカイ」→「ンカイ」

- ・「船は 何れにありますか。」(『沖縄対話』第五章「遊興之部」第一回 No19「和文」)

(明治期)「フネー マーナカイ ウウヤビーガ。」

(現代語)「フネー マーンカイ ウウイイビーガ。」

(2)の「ナカイ」は「ンカイ」と似た助詞で空間名詞や代名詞などに付いて、「ンカイ」よりも「ナカイ」の方が「場所を限定」することが多く、現代語でも使用される。例えば「石の下に」(「第五章「遊興之部」第一回No. 23「和文」)は現在でも「イシヌシチャナカイ」である。

2. 単語の違い

明治期と現代語では以下に示すように使用される語彙が異なることがある。ここでは「第五章 遊興之部」の各回から1語ずつ示す。

日本語	首里方言		回, 番号
	明治期	現代語	
煎茶	チャー	ウチャ	第一回, No14, 15
塩焼	シューヤチ	ヤチュ (シェー)	第二回, No. 30
随分	ズィーブン	イッペー ユー	第三回, No. 16
もし	サリ	ー (グブリーサビラ)	第四回, No. 3

他にも明治期と現代語との間に単語や文法の違いがいくつかみられるが、その他については稿を改めて報告したい。

(文責：仲原 穰)

註

1. 『沖縄対話』は明治13(1880)年に沖縄県学務課によって編集された教科書である(上下2巻の分冊)。本永(1983: 554)では本書の作成理由について「廃藩置県直後の沖縄で共通語を教えるため」としている。
2. 「遊興之部」は、明治13年刊行の初版本『沖縄対話』では「第四章」、明治15(1882)年の改正再版では「第五章」である(改正再版本では初版本の第八章「名詞之部」が第一章に編成されたため)。本稿では初版本と同じ「第五回」とする。
3. この首里方言に関して、本永(1983: 554)は「内容は、ごく日常的な語句と会話文をとりあげて、共通語と方言(首里の貴族語)の対訳を並記したものである」との見解を示している。
4. 本稿の話者は、首里で生まれ育った仲里政子氏(1923年生)、新垣恒成氏(1932年生)、渡名喜勝代氏(1937年)、山田美枝子氏(1937年)、国吉朝政氏(1940年生)と石垣市生まれであるが、幼い頃より家庭内では明治生まれの両親が話す首里方言を聞いて育った首里在住の大道好子氏(1938年)である。なお、林京子氏(1951年生)も首里生まれだが、今回は話者のサポートとして加わってもらった。
5. ウドゥントゥンチのことは話を話す話者はあまり多くないが、中松(1982)や比嘉(1987)でインフォーマントになっている方々であり、『沖縄対話』の話者の一人とされる「護得久按司朝常氏」もこの系統の家柄である。
6. 当研究会の正式名称は「首里言葉の集い」で設立は1998年である。当時沖縄県立芸術大学教授(現名誉教授)の加治工真市先生が「滅び行く首里方言を記録、保存しておきたい」という目的で創設し、一般教育棟2階の一室で行っていた。仲原の指導教員であった加治工先生の退職に伴い、一端研究会は休会となった。2003年の再開以降は、仲原が事務局をつとめ、会場を沖縄県立芸術大学附属研究所へと移した。初期メンバーは中村春子氏、故比嘉恒明氏、新垣恒成氏らであり、現在は仲里政子氏、新垣恒成氏、大道好子氏、渡名喜勝代氏、山田美枝子氏、国吉朝政氏、知念ウシ氏、渡名喜浩子氏、林京子氏、仲原らが集い、毎週水曜日14時から研究会を開催している。

参考文献

- 沖縄県庁 編(1975[1980])『沖縄対話〔復刻版〕』国書刊行会、東京
- 伊豆山敦子[編]『放送録音テープによる琉球・首里方言—服部四郎博士遺品—』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京
- 内間直仁・野原三義(2006)『沖縄語辞典—那覇方言を中心に—』研究社、東京
- 国立国語研究所[編](1963)『沖縄語辞典』大蔵省出版局、東京
- 糖業研究会出版部[編](1916)『琉球語便覧』糖業研究会出版部、沖縄
- 仲原穰・比嘉恒明・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政(2012)「現代首里方言訳『沖縄対話』(1) —「第一章 四季の部」(春・夏)—」『沖縄芸術の科学』第24号 沖縄県立芸術大学附属研究所、沖縄、pp. 15-31
- 仲原穰・比嘉恒明・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政(2013)「現代首里方言訳『沖縄対話』(2) —「第一章 四季の部」(秋・冬)—」「第二章 学校の部」『沖縄芸術の科学』第25

- 号 沖縄県立芸術大学附属研究所、沖縄、pp. 113-154
- 仲原穰・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政(2014)「現代首里方言訳『沖縄対話』(3)―「第三章 農之部」『沖縄芸術の科学』第26号 沖縄県立芸術大学附属研究所、沖縄、pp. 151-176
- 仲原穰・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政・渡名喜勝代・山田美枝子・大道好子(2015)「現代首里方言訳『沖縄対話』(3)―「第三章 農之部」『沖縄芸術の科学』第26号 沖縄県立芸術大学附属研究所、沖縄、pp. 125-153
- 中松竹雄(1982)「IV 沖縄県那覇市首里」国立国語研究所[編]『方言談話資料(6)―鳥取・愛媛・宮崎・沖縄―』国立国語研究所、東京、pp. 247-349
- 野原三義(1998[1977])「那覇方言の音韻」『新編 琉球方言助詞の研究』沖縄学研究所、東京、pp. 713-730
- 西岡敏(2014)「沖縄語首里方言の助詞「ンカイ」「ナカイ」「ニ」「ガ」「カイ」―共通語の助詞「に」「へ」と対照させつ―」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』沖縄国際大学日本語日本文学会、沖縄、pp. 1-11
- 西岡敏・仲原穰[著]、伊狩典子・中島由美[協力](2006[2000])『沖縄語の入門(CD付改訂版)―たのしいウチナーグチ』白水社、東京
- 比嘉成子(1987)「《資料紹介》首里方言自由会話『旧正月と大晦日の思い出』琉球方言研究クラブ30周年記念会[編]『琉球方言論叢』琉球方言論叢刊行委員会、沖縄、pp. 73-91
- 本永守靖(1983)『『沖縄対話』おきなわたいわ』『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、沖縄、p. 554

付記

仲原 穰

初めて波照間永吉先生とお会いしたのは、沖縄県立芸術大学の旧デザイン棟で毎週金曜日の夜に開催されていた「おもろ研究会」でのことである。大学の同期生でゼミだけでなく、サークルも一緒であった飯田泰彦氏が一足先に入会していたこともあり、参加しやすかった。丁度大学を卒業して研究生として1年母校に残っていたこともあり、ゼミと研究生でも同期であった玉城伸子氏と共におもろ研究会だけでなく、波照間先生の研究室や附属研究所にも通った。当時、附属研究所は龍潭のほとりの旧図書館の3階にあり、毎週土曜日には、後に発刊された『沖縄古語大辞典』(角川書店)の編集作業や原稿の検討会が行われていた。

今にして思えば、他大学の学生が学会をリードする研究者でもある波照間先生の元へ通うというのも突飛な話ではあるが、沖縄で唯一の文系の大学院が開設され、その担当教員でもあった波照間先生からはいろいろなことを教えていただいた。

波照間先生の講義(邦楽〈現在は「琉球芸能」専攻〉の「詞章研究」や大学院のゼミなど)の聴講をお認めいただき、教室の隅で拝聴した。同大学院へ入学後も修論の副査としてご指導いただいた。おもろ研究会では入会した日からオモロの発表をあてられ、演習形式で鍛えられ、現在まで23年間続けるきっかけにもなった。フィールドワークでの臨地調査や話者とのやりとり、データの収集・保存の仕方なども波照間先生から多くを学んだ。

また、沖縄文化協会の総会・研究発表回のお手伝いや機関誌『沖縄文化』編集の学生実務をはじめ、波照間先生の博士号の御著書の入力作業、沖縄・八重山文化研究会のお手伝いな

ど数多くの仕事を通して、一般社会の仕事の厳しさや守るべきルールも教えていただいた。

最も印象的だったのが、研究スタイルである。それまで文学の論文しか読んでいなかったため、仲宗根政善先生や外間守善先生から指導を受けた波照間先生の用例に根ざした実証的な文学研究は非常に魅力的である。この実証主義を大切になさるからこそ、おもろ研究会や沖縄・八重山研究会などの研究会、琉球古典の基礎的な文献作り（『定本 おもろさうし』『定本 琉球国由来記』『沖縄古語大辞典』、『竹富方言辞典』など）の地道な活動をひたむきに続けてこられたのであろう。

私は途中で文学から言語へと専門を変えたが、先生との出会いがなければ、現在のような研究を続けられなかったと強く感じている。先生に戴いた学恩を少しでも次の世代へ引き継げるように、今後も精進していきたいと思う。波照間先生、沖縄県立芸術大学でのお仕事、本当にお疲れさまでした。